

11. 12月の飼養管理

岡山県酪農試験場

11月から12月にかけては、秋の取入れ、麦播、米の調製等で仲々忙しく、このため乳牛の管理は怠り勝ちとなり、忙しさのためちょっとしたことにもおこりっぽくなります。乳牛を管理する場合おこることは乳牛をいらだたせ、牛乳の生産を減少させます。

先日山陽新聞に次のようなことが記されてきました。

「イギリスのフックス博士が史上最初の南極横断旅行に出発するとき、隊員の選定は二つの原則にしたがったという。第一に何か一つ専門技術を持っているもの。これは理解できる。第二の原則がおもしろい。おこりっぽくない人というのである。アフリカの土人たちが、酋長をえらぶとき、おこりっぽい男は絶対に選ばないそうだ。あらゆる天災、猛獣、異種族などの脅威にいつ直面するかもしれないのに、おこりっぽい人間は正確な判断をあやまって、部落民全体を危険におとしいれるからである。まさにフックス方式である。おこりっぽい男をよく総理大臣に選ぶどこかの文明国民に聞かせたい話だ。」

以上のように述べられていましたが、腹を立てますと心臓の冠動脈がケイレンして狭心症発作を起しやすいことはよく知られています。最近わかったことですが、おこると脂肪組織が急に消滅してコレステロールとなり血中に出現するそうです。おこりっぽい人が早く動脈硬化になるわけがこれで証明されています。やせている人がおこりっぽいのではなく、おこりっぽいからふとれないのです。因果が逆ということになります。かく言う私もその代表的一員に属するものと自負しています。

いささか横道にそれましたが、要するに忙しく、いらいらしている時でも平素と同じように愛情を持って乳牛の管理にはげんでいただきたいと思います。

一. 牛舎の防寒設備と換気

この頃から気温は急激に変化して、降霜も見るようになり、特に県北部では相当寒さが増して来ます。このため畜舎の防寒、換気、牛体の手入れ、日光浴、運動など冬ごもりに対処して事前の準備を必要とします。特に本年のように流感の流行する年の防寒設備には細心の注意をはらい、すきま風の侵入をなくするよう工夫して下さい。しかしこの場合保温のみに重点を置きますと、換気が不良となり、舎内は湿気がこもり、乳牛の健康状態は悪くなり、乳量は日々減少し、また結核牛などがいた場合自家感染を起す原因ともなりますから保温と換気がうまくゆくよう心掛け、常に牛舎は適温の摂氏10—15度に保ち、夜間において零度以下にならないよう努力して下さい。

二. サイレージと根菜類の給与

青刈類も終り、また青草も全く枯れた冬期飼料の自給態勢に入ることになりますが、周到な自給計画を樹てて3月までの冬飼時期をきりぬけていただきたいと思ひます。

飼料特に基礎飼料はサイレージ、甘藷、甘藷蔓(乾)、かぶ、大根などを与える頃になりますが、サイレージは一般に妊娠しているものや、幼いものには与え過ぎないようにします。またサイレージのみを単味で与えないで、乾草、根菜類と混与するようにします。

サイレージの食い込みは成牛では最低10kg、最高25kg程度ですが、普通15—20kg程度にとどめた方がよろしい。20kg以上与えますとかえって悪い結果をまねくことがあります。またこの場合腐敗した部分は注意して取除いて与えます。腐敗したものを食べた場合、食欲不振となり、乳量も減って来ます。体重550—600kg、脂肪率3.2—3.4%、乳量1日20—30kg程度の乳牛には一日に次のようなものを給与すると、大体要求養分量を充すことができます。

野乾草 3—5 kg

岡山畜産便り1959.11・12

サイレージ 15-20kg

ビーパルプ 1-2kg (又はかぶ7-10kg)

稲葉 1-2kg

配合飼料 7-10kg (DCP10%, TDN60-65%
程度のもの)

育成牛については体重によって異なりますが、生後6ヵ月で離乳した後は2-3kg程度から給与し、だんだんと増量しますが、1年未満のものは8kg程度以下にとどめた方がよろしい。

次に根菜類ですが、成牛に対しては30kg程度が限度で、これ以上給与する場合は下痢をまねくおそれがありますから、要は便の状態により給与すべきと思います。仔牛に給与する場合は特に便の状態に注意して与えます。一度失敗して下痢をまねきますとなかなか治らず、発育が止まりますから、最初は1kg程度から始めて、多給はさけるようにします。また根菜類を給与する場合、食い込みを容易にし、食道梗塞を防止するため、イモツキまたは押切などで小さくして与えます。この場合凍ったものを与えないよう心掛け、仔牛に与える場合はカゴなどを入れて湯をかけ、あたためた後に与えるのも下痢を防止する一方法と思います。

甘藷は乾燥したものは、可消化養分総量が米ぬか、麩と同じ位になります。甘藷は一般に生のまま、またはサイレージとして利用する場合は殆んどですが、特に生のまま貯蔵した場合、黒斑病で腐敗したものを与えますと中毒症状を起して死亡する場合がありますから注意を要します。腐敗しかけた甘藷を煮て与える場合を時に見かけますが、腐敗したものは煮ても毒素は消えません。

三. 管理

寒さがだんだん加わって来ますと、青刈飼料はなく、また運動も不足勝となります。日光浴を充分行うことにより、体中にビタミンDを造成し、乳牛の化骨を図り、骨軟症の予防にもなります。特に仔牛は暖かい日には充分日光浴をさせましょう。運動場が狭まい場合は時々おい運動を行います。冬期は体毛が長くなり、

とかく手入れ不足になり勝ですが、牛体の手入れは舎内管理のうちでも重要なことで、特に後軀の手入れを充分行うことによって、皮膚の機能を良くし皮膚病の予防と牛体の抵抗力を増すようにします。搾乳後は乳頭附近を清拭しませんと、寒さのため乳頭のヒビ、アカギレ等を生じ、搾乳をきらうようになりますから、早目に見出して治療してやるようにします。

仔牛の哺乳については、搾りたての牛乳でも直ぐ冷えやすいですから、もう一度適温(仔牛の体温程度)に暖めて与えるようにしましょう。(多田)